

[03_02]情報処理教育広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6767914>

出版情報：情報処理教育広報. 3 (2), 1980-11. Educational Center For Information Processing,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



計算機に教えられること

北 村 泰 一*

私は物理学科の学生を対象とした情報処理の講義を受けもっている。学生には、接続時間にして“100時間”の端末機の使用が認められている。ところが、授業がはじまって間もなく、A君がもうその“100時間”がなくなったといってきたのを皮きりに、B君C君……も同じことを名乗ってきた。計算してみると、土日や休日を除くと1日平均3～5時間も“接続”していたことになる。これでは1日中端末機の前に坐っていたことになるではないか。事実そうであったらしく、その代り、その学生君達はフォルTRANも知らぬ状態から、わずかの間にちょっとしたプログラマーの腕前に迄達していた。教育センターにお願いして追加の割当てをいただいたが、そんな早い時期に割当て時間を使い尽くしたのは、物理学科の学生だけだったらしい。物理学科では講義数が比較的少なく、学生が“自習”をする時間が充分にあるのがその原因と考えられる。こうしたことは今年だけのことでなく、毎年、何人かは計算機に夢中になる学生が出るようである。

端末機にむかう学生の目はキラキラしていた。学生実験や講義の時には、ついぞみかけぬ姿であった。一体何が学生をこう夢中にさせるのだろうか。ある学生君が言った。「すぐ応答がありますからネエ」。自分はハット胸をつかれた思いがした。私達の講義は、永い間にこの“応答”を忘れてしまっていたのではないだろうか。講義は先生の一方的な「話し」に終り、学生との対話（広義のもの）は殆んどないという場合が多いのではないだろうか。クラスの学生数が余りに多すぎるということを理由に、私自身もこの“対話”の努力を怠っていたことを認めざるを得ない。

学生は“対話”を求めている。計算機には“ある種”ではあるが、多人数とこの“対話”をする能力がある。多人数教育という現実の場にあって、自分の講義の中に、どうやってこの対話を維持してゆくか、考えさせられるこの頃である。

* 理学部助教授（前センター運営委員）